

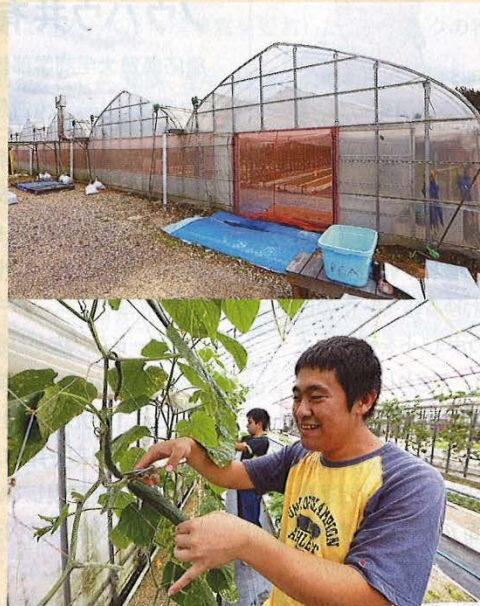
障害者雇用を促す農園が注目される理由

障害者雇用を促すサービスを展開し注目を集める企業がある。都市近郊に障害者が働きやすいビニールハウスの農園を整え、企業に貸し出すとともに、そこで働く障害者も紹介するという事業を手掛けるエスプールのプラス（東京都千代田区）だ。企業は農園を借り、障害者を社員として雇うことで、自社の雇用率に算入できる仕組みだ。現在、約130社がこの事業を利用している。

エスプールのプラスが事業を始めたのは2010年。千葉縣市原市に6700坪の農園を開いた。現在は全国8カ所に展開している。

農園の特徴は、何といても障害者が働きやすいように環境を整えている点だ。土を使わず培養液を利用しており、クワやトラクターなど危険な農機具も使わない。このため生産性はよくないが、比較的軽作業で野菜を栽培し、収穫の喜びも味わえる。障害者は基本的に3人で1組のチームを組み、そこに地域の高齢者などが1人、管理者の立場で加わる。作業の内容や休憩時間なども管理者が声をかけながら進めていく。

現在、全国の農園で働く障害者は650人に上る。大半は知的障害者で、約100人程度が精神障害者だ。事業を始めてか



上はエスプールのプラスのビニールハウス農園（千葉縣市原市）。下は農園で働く田丸雄登氏（手前）。実を傷つけないよう注意して収穫作業に当たる

らの定着率は95%と高い。

農園での人事研修も

エスプールのプラスの農園を利用する企業の中には、障害者が育てた野菜を社内で配布して自社の障害者雇用を周知したり、農園で社員研修を実施する例も多いという。

15年からエスプールのプラスを利用するSMBC日興証券は、ノーマライゼーション研修という農園での研修プログラムを始めている。「研修は全社員が対象。まずは担当役員ら幹部が参加したが、障害者が働く姿に触れ、彼らの可能性を実感したという感想が聞かれるなど意義のある研修ができた」（人事部第三人事課の岸豊氏）という。

エスプールのプラスの事業をめぐっては「障害者を雇用するための環境が整っており、企業にメリットはあるが、企業とは離れた場所で作業をしているので、障害者の社会参加や職場の人材の多様化を促すという狙いに合致しているのか」という声もある。

これについて和田一紀社長は「企業の障害者雇用の担当者には定期的に農園に通ってもらっている。社員である障害者と頻繁に顔を合わせることで、障害者が企業への帰属意識を持てるよう配慮している」と語る。都市の近郊に農園を作るのはそのためでもある。

障害者の能力を活用し、共に働く社会は大きな目標だが、すべての企業がすぐに達成するのは難しい。エスプールのプラスの農園が注目される現状は、障害者雇用の課題を映し出している。